
ドラゴンとおひめさま

襟立 とびお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンとおひめさま

【Nコード】

N7291D

【作者名】

襟立 とびお

【あらすじ】

とある所にいるといわれるドラゴンとおひめさま。全ては読者の想像に任せます。ひらがなとカタカナでしか文章になっておりません。

はじまりはじまり

むかし むかし セインガルドという ところに ふるくて おおきな おしろが ありました。おしろには かわいいくて うつくしい おひめさまと それはもう おおきな りゆうが いましました。りゆうは ちいさい おひめさまを とても とても かわいがって おりました。おひめさまも まるで おかあさんのように りゆうを あいしておりました。

しかし りゆうは じぶんと おひめさまが ちがう しゅぞくだということも いずれ はなればなれに なってしまうことも わかっておりました。それでも りゆうは おひめさまを いっしょうけんめい あいしつづけました。おひめさまは それに こたえるように すくすくと そだつていき 14さいになるころには たくさんの おとこのひとから ぷろぽーずを うけるようになりました。

しかし おひめさまは くびを たてに ふりませんでした。いつのまにか りゆうを おかあさんと よぶようになった おひめさまは ぷろぽーずを うけることによって おかあさんとはなればなれになるのが とても さびしかったのです。

続き

きせつが にかい うつりかわるころ ひとつの うわさが たち
ました。

『おひめさまを たすけだしたものには たくさんの きんかと
おひめさまと けっこん できる』と。

その うわさは ほんとうではない。

うそ であると おかあさんの りゅうは ほえました。しかし
おかねと おひめさまの うつくしさに めがくらんだ おとこた
ちは つぎつぎと おしろに はいってきました。

りゅうは ひつしに うわさを ひていし おひめさまもまた り
ゆうと はなればなれになるのは ぜったいにないと いいました。
しかし おとこたちは りゅうが おひめさまを 『だましている』
のだと いって ききませんでした。おひめさまは いっこうに
かえるきがない おとこたちに いいました。

『わたしは おかあさんを あいしております。おかあさんも わ
たしを たいせつに おもっています。おかあさんが あいしつづ
けてくれている かぎり わたしは だれのものにも なるきは
ありません』

『おひきとりください』

いつのまにか おおきくなっていた おひめさまを かんじて り

ゆうは なみだ しました。そして りゅうは おもいました。

『わたしは しあわせ だ。いつか おひめさまを わたしより あいし おひめさまが わたしより あいす ひとが あらわれたら わたしは そのひとと おひめさまの ために とおくに たびだとう』と。

おひめさまの ことばに おとこたちは しぶしぶ おしろを あとに しました。そのなかの ひとりを のぞいて。

『では われが そなたに ふさわしい ものであると しょうめい しよう』

おとこは リュンゲベルグ の おうじ と なのったのです。おひめさまは りゅうのほうを みて にっこりと ほほえみました。それから おうじは はなを おくり てがみを かき ときどき おしろを おとずれては すこしだけ はなしをして まんぞくしたように かえっていきました。

りゅうと おひめさまは さいしょは いぶかしげに おもっていたが しだいに おうじに たいして こういを もつようになっ ていました。ほかの おとこたちもまた おうじと おなじような ほうほうを とりましたが どれも おうじに いだいたような こういを もつことは ありませんでした。

きせつが みどりから あかに かわるころ おうじが おしろを たずねてきました。そこには りゅうの かたわらで すやすやと ねむる おひめさまが いました。

『…』

りゆうは だまって おうじを みていました。おうじは おひめ
さまを おこさないよう ちいさな こえで りゆうに はなしか
けました。これが おうじと りゆうが はじめて かいわ した
とき でした。

『りゆうよ きいてくれ。われは あさましいおとこ なのだ。わ
れの ちちは そろそろ てんに めされる。われは そのあとを
つがねば ならぬ。だから われは ちちに せめて われに
このさきの ゆくすえを たくせて いけるよう きさを むか
えたかった。ただ それだけで そなたの ひめに ちがついた。
われは ひめを むかえることで えられる まわりからの しょ
うさんと しつと そして なにより ひめの びぼうが ほしか
った』

しばらくの ちんもくが くうきを とどめました。りゆうは わ
かっていた かのようにならずと そつと やわらかく おひ
めさまを おうじに あずけました。おうじは なにが おこった
のかのか わからず かおを そらしてしまいました。すると り
ゆうが おもく とざされた くちを ひらきました。

続きの続き

『たしかに さいしょは そうだったのだろう。わたしには わかる。しかし いまの おひめさまを みる そなたの ひょうじょうは ちがう。そなたは おひめさまを あいして おるのだろ。わたしは そなたに あえ そして 「むすめ」を おくることが できることを しあわせと おもう。ねがわくば そなたと むすめの ゆくすえを みたかった』

そういうと りゅうは たたみこまれた おおきな つばさを ひろげ いままさに とびたとう とした。

『さて ひめの ははぎみよ。そなたは どこへ いこうとして おるのだ』

『わたしは きめている のだ。いつか むすめを わたしより あいし むすめが わたしより あいす ひとが あらわれたら わたしは そのひとと おひめさまの ために とおくに たびだつ のだと』

『なぜだ』

おうじは そばで ねむる おひめさまを きにせずにおおごえを あげていました。

『わたしが じゃま だから。わたしが いぎょうの もの だから。わたしが いることで ふたりに めいわくを かけるから。わたしは ふたりの しあわせを ねがって おるのだ』

いつのまにか りゅうのひとみからは なみだが こぼれおちて
いました。とめどなく ながるるのを りゅうは かのじよは ぬ
ぐおう とはしませんでした。

『ひとは みな わたしを こわがり うらみ しいたげ そして
めの かたき にする。いままで きた おとこたちも そうだ
った。おうじ そなたも おなじ だろう』

おうじは だまっていました。だまっている ことしか できなか
ったのです。すべてが そう なのだから。ひてい することも
いいかえす ことも できませんでした。

『しかし むすめが そなたを あいして しまったの だから
しかたがない。きつと わたしより そなたを えらぶ。わたしと
いっしょに いれない。むすめも しいたげられる からだ。だ
から わたしは さらなければ』

『だったら われが すべてを かえてやる』

りゅうの わきでる かんじょうを さえぎる ように おうじは
さけんだ。

『われは まだ なにも いていない だろう』

おうじは いいせまるように こぶしを にぎりかえし いいはな
ちました。

続きの続きの続き

『われは そなたら おやこを あいして しまったのだ。われは そなたらが ときどき みせる たがいに ほほえむ その おが ふたりが いとおしいのだ。それを これからもずっと われが てんに めされる ときも そばで みせて ほしい』

おうじは ちいさく そして いまにも きえそうな こえで 「だめ か」と つぶやきました。

『ありがとう』

だまって きていた りゅうは そう つぶやくと おうじのそばで ねむっていた おひめさまに むかって いいました。

『もう いいよ おかあさん。わたしは この ひとと いっしょになりたい』

おかあさんと よばれた おひめさまは おうじの こむぎいろのはだに いままさに きばで かみころさんとばかりに せまっておりました。その かおは さきほどまでの うつくしい おひめさまではなく りゅうが おこったような こわい かおをしていました。おうじは それを みて びっくり しましたが ふしぎと こわくは ありませんでした。おひめさまは その ようすを みて きばを しまつと すつと たちあがり りゅうのほうへと あるき りゅうの あたまを なでると おうじに いいました。

『このこは わたしの むすめ。だます ようなことを して も
うしわけ ありません でした。わたしたち りゆうぞくは もと
より このような すがたで くらして いました』

そついうと おひめさまは りゆうを さんど なでると ほおを
よせ はなしを つづけました。

『わたしたちは おんなの しゅぞく。まれに おとこが うまれ
る だけで それが ほとんど なのです。かくいう わたしも
りゆう。あなたたち にんげんとは ことなる すがたを してい
ます。それでも おうじ わたしたちを あいしていますか』

おうじの めは おひめさまを みて しせんを はずそうと し
ませんでした。すこしの じかんが たち ひが あかく そまろ
うと するころに おうじから こたえが かえって きました。

続きの続きの続きの終わり

『ああ われは そなたらを いっしょう あいし つづけよう。
それに このさき いくら ときが きざまれようと も われの
このきもちが しずまることは ない だろう。それに このまま
かえっても われが ぶじに くへ もどれるかも あやうい
からな。ちようどよく われは そなたらと いっしょに いなけ
ればならない。はじめて そなたらを みて さげんだのも いま
ここに いるのも 「うんめい」 って ものなの かも しれ
ぬな』

おうじは そういい おもわず わらって しまいました。それに
つられてか りゅうのおやこも わらい はじめました。

『わたしが みこんだ とおりの ひと でしたね。ひとつだけ
のぞいて おつとに にてますね』

そういうと おひめさまは くすくすと わらいました。おうじは
それを きいて きもんに おもい たずねました。

『ひとつだけ のぞく ですか。どういふ いみ ですか』

『あなたは せいじつそう ってこと ですよ』

おひめさまは そういうと おうじに えがおを かけた。おうじ
は みょうな おかんを かんじましたが きゆうだろうと おも
いひとまず ほめてもらった ことに たいして おれいを し
ました。

『では おうじ。むすめを よめに もらっては くれませんか』

おひめさまは おうじに りゅうの まえに できるよう いい
して おうじに 「ちかいのしるし」を つけるように いいまし
た。おうじは そつと りゅうに ちかづくと その おおきな
くちに キスを しました。すると りゅうが ひかりだし その
ひかりは おうじと おなじ ひとの すがたへと かたどり
はじめたのです。おうじは その まぶしさから めを とじて
いましたが しばらくすると その ひかりが よわまり よわま
ると どうじに やわらかい かんじよくが おうじに ふれて
きました。

『そ そなたは いったい…』

おうじの めのまえには おひめさまをも かすませるほどの う
つくしい じよせいが たっておりました。

『わたしたち りゅうぞくは あいし あいされた ものと むす
ばれる とき そのひとと おなじ すがたに なるのです』

おひめさまは そういうと 「うまれかわった」むすめに ひとつ
の めのを かけてやりました。

『しかし』

こえが ひびき わたると おひめさまは おうじに ちゅうい
しました。

『むすめを かなしませては いけませんよ。かなしませたとき
あなたは わたしの おつと おなじ 「うんめい」を たどる
かも しれませんか』

そして さいごに 「わたしの ちを ひいている のだから」と
みみもとで ささやきました。おうじに またもや おかんが
はしりました。そして おうじは おもわず きいてしまいました。

『いま だんなさまは いずこへ…』

ふふふと おひめさまは わらうと くちに ゆびを あてて
いました。

『あのひとが わるいの ですよ。うわき なんて するから』

おうじは ちょっかん しました。

『ま まさか…』

『きを つけて くださいね』

おひめさまが にっこり わらうと うしろから りゅうのむすめ
が ひょっこり かおを だして いいました。

『うわき したら たべちゃうよー があー』

おうじは そういった りゅうのむすめの えがおに たいして
にがわらいでしか こたえられませんでした。

こうして りゅうのおやこと おうじは しあわせに くらしたと

さ
めでたし
めでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7291d/>

ドラゴンとおひめさま

2010年10月8日21時22分発行